

## 東北大学大学院文学研究科「日本学総合科目Ⅱ」 (修士課程1年生以上) 授業実践報告

茂木, 謙之介  
東北大学文学研究科 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4842490>

---

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.107-107, 2021-04-30. 雷音学術出版  
バージョン :  
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

### 1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は「日本学の古典／原典を読む」と題し、日本学専攻の大学院博士前期二年の課程(修士課程)初年度の学生を対象とし、日本学専攻所属の複数の教員がそれぞれの専門に基づくテキストの講読を行う演習である。

シラバスは各教員共通のものであり、授業目的・概要としては以下の通りとなっている。

日本学に関する古典的な文献(著作・論文)・日本学の研究資料となる原典を丁寧に読む。日本学の古典の理解、原典の多面的な読解を通じて、日本学研究のテキストから多様な観点を引き出し、日本学研究の基盤とすると同時に、日本学の考え方・方法を身につける。

成績評価としては「レポート 60%／参加態度 40%」であった。

執筆者は「思想・文化」に関連する講読の担当を要請され、テーマとしては「戦後」文化を考えるを設定した。近年戦後文化をめぐる研究は諸研究領域を横断しつつ深化を続けており、関連する論集もその数を増している。現在の学問場において屢々取り上げられている研究動向をつかんでおくことは研究の世界に足を踏み入れつつある学生にとって意味があると考えたため、また歴史・言語・思想・文化といった多分野にわたる受講生を想定したとき、時期区分を絞りつつ多様なジャンルの研究成果が集積されたテキストを講読することの積極性をみとめたため、このようなテーマを採用した。

テキストとしては、坪井秀人編『戦後日本文化再考』(三人社、2019)、坪井秀人編『戦後日本を読み替える』全6巻(臨川書店、2018)の2シリーズを中心に据え、適宜参照するものとして岩崎稔ほか編『戦後日本スタディーズ』全3巻(岩波書店)を挙げた。毎授業3章程度を受講生に割り振り、報告担当者は担当章について報告レジュメを作成するとともに、前日までに Google Classroom にPDF形式でアップロードし、Google Meet を利用した当日の授業では冒頭10分程度で論文の要旨と問題点・疑問点等についてプレゼンテーシ

ョンすることを求めた。報告後、その内容を踏まえて受講者全員で20分程度のディスカッションを行うという、30分1セットのメニューを1コマ当たり3回行った。

授業日程としては以下の通りであった。

第1回 イントロダクション／第2回 3シリーズについて概説・担当回の決定／第3回 それぞれの「序」を読む／第4～14回 各報告者による報告とディスカッション／第15回 まとめ

第3回までは基本的に執筆者による解説であり、第4回以降具体的な検討に入った。なお第3回は対面で行い、論文集のコンセプトについて解説を行うとともに、特定の論文について講読し、検討する際に行うべき手続きについて説明を行った。

### 2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

当該授業は火曜日1限に設定されており、Google Meet による演習形式の授業は通勤・通学の過密な時間帯を避けられるという意味で感染予防の側面では特に有効に働いた側面があったと考えられる。また対面の場合は、レジュメを紙面にすることを求める予定であったが、受講生が負うこととなるそのコストの低減は積極的に評価できよう。

一方、オンラインでの演習形式の授業に孕まれる共通した問題として、お互いの反応が読めないために発生する弊害は避けられなかったものと思われる。具体的には議論の際に些か間延びした瞬間が生まれたり、応答がごちなくなってしまうことや、議論に参加できない学生が生まれることなどが挙げられる。これらについては更なる改善の余地があるといえるだろう。